

## ギリシア・ローマ時代のパイディアと修辞学の教育\*

山田 耕太

### 1. はじめに

「リベラル・アーツ教育」は、19世紀のイギリスの人格教育（ジェントルマン教育）の根幹をなすものであり、19世紀以降に創設されたアメリカのリベラル・アーツ・カレッジの教育の中心であり、日本のキリスト教主義大学の教育理念を形成するものである。だがそれは、「人文学」（humanities）の根幹をなし、ヨーロッパの教育と文化のキー・コンセプトの一つである。その源は、ギリシア・ローマ時代に遡る。

教育の歴史において古代ギリシア文化の果たした役割は計り知れない。それはヨーロッパの教育史において決定的な役割を果たしたばかりでなく、近現代のあらゆる世界の教育史をも刻印づけている。「ヘレニズム文化」あるいは「ヘレニズム・ローマ文化」と称される古代ギリシア文化とその影響を受けた古代ローマ文化の中心は、「教育」（パイディア）であった。<sup>(1)</sup>

古代ギリシアの教育は、「パイディア」という自由人の教育と「テクネー」（*techne*、技術）という職人や奴隷の教育に分かれていた。すなわち「パイディア」は、普遍的な知識ばかりでなく人間の徳を育むことを目的として、主に言葉を用いる職業の自由人の教育であった。それに対して、「テクネー」は単純な手順から複雑な熟練を要するものまでの規則を教え込むことを目的として、手を用い機械的な職業に携わる職人の実際的な教育であった。<sup>(2)</sup> 「パイディア」では「健全な精神は健全な身体に宿る」という考えの下で、知育・徳育・体育を通じた人格教育、すなわち全人教育が行なわれ、「テクネー」では技術教育と職業教育が行なわれていた。<sup>(3)</sup>

英語の「リベラル・アーツ」（*liberal arts*）という言葉は、ラテン語の "*artes (disciplinae, studia, litterae) liberales*" に由来するが、それはギリシア語の "*enkyklios paideia*" をラテン語に訳したものである。<sup>(4)</sup> 「リベラル・アーツ教育」とは、元来どのような意味であったのであろうか。それはいつどのようにして形成されてきたのであろうか。その中で、コミュニケーションの学であった修辞学はどのように位置づけられ、そこではどのような教育が行なわれていたのだろうか。本稿では、これらの問いに答えていくことを試

みる。

## 2. 「エンキュクリオス・パイディア」の意味

ヘレニズム時代に自由人の教育は、「エンキュクリオス・パイディア」(enkyklios paideia)<sup>(5)</sup>と呼ばれていた。「リベラル・アーツ教育」の語源である「エンキュクリオス・パイディア」(enkyklios paideia)という言葉は、「パイディア」という名詞に「エンキュクリオス」という形容詞がついた言葉である。

「パイディア」(paideia)は「子供」([sg.] pais, [pl.] paides)を訓練して成人にすることを意味するギリシア語であるが、「教育学」(pedagogy)の語源でもある。それは「教育」ばかりでなく教育の結果である「教養」や「文化」をも意味する。<sup>(6)</sup>あるいは現代の言葉に置き換えれば、「教育」「文学」「文化」「文明」「伝統」を含む幅広い概念である。<sup>(7)</sup>しかし、キケロやワッロはそれをラテン語に翻訳する時に、対応するラテン語がないので敢えて「フマニタース」(humanitas, 人間性、人間的教養)とも訳した。<sup>(8)</sup>

「パイディア」は、「パイデウエイン」(paideuein)という動詞から派生した名詞であり、動詞形には、第一に「子供を育てる」、第二に「教えて訓練する、教育する」、第三に「正しくする、矯正する」という意味がある。

「エンキュクリオス」という形容詞は、第一に、「エンキュクロス」(enkyklos)という形容詞と同様に、「円を描いて」「丸い」という意味で用いられた。それは、一方では、演劇で合唱と舞踊を行なう「コロス」(choros)<sup>(9)</sup>の動作に関して、「円を描くコロス」(hoi enkyklioi choroi)<sup>(10)</sup>などのように用いられ、他方では、天体の現象に関して「円を描く運動」(he enkyklios kinesis)<sup>(11)</sup>などのように用いられた。そこから派生して、第二に、「日常の公的奉仕」(enkyklioi leitourgia)<sup>(12)</sup>などのように、特別な教育や技術を要しない「日常の」「普通の」「毎日の」という意味で用いられた。第三に、そこに軽蔑的なニュアンスが加わって、「陳腐な」「平凡な」という意味で用いられたが、その例は極めて稀である。

「エンキュクリオス・パイディア」の語義に関する議論で、Hermann Kollerはその語源が、一方ではプラトン以前の「ムーシケー(音楽)」にあることを指摘し、他方ではそれが「日常的な教育」「毎日の教育」を意味することを指摘した。<sup>(13)</sup>それに対して、Friedmar Kühnertは、古代の初期の資料には「日常的な教育」「毎日の教育」という意味は見当たらないことを指摘し、「円を描くように」が基本的な意味で、円環的な科目を通して「職業的でない教育」「一般的な教育」を意味することを指摘した。<sup>(14)</sup>これらの議

論に対して、L. M. de Rijk は、ギリシア人がすべて教育を受けたのではなく、読み書きなどの初等教育は一般的に広まっていたが、「エンキュクリオス・パイディア」は限られた自由人の職業的な専門教育への準備であったので、「毎日の教育」「日常的な教育」というよりも「円を描くような」円環的な教育が基本的な意味であり、それは音楽や舞踏に起源が遡ることを詳細なデータに基づいて指摘した。<sup>(15)</sup>

以上の議論から、「エンキュクリオス・パイディア」は、円環的に配列された科目による人間教育が基本的な意味であり、クインティリアヌスによれば「学びのその円環のコース」(orbis ille doctrinae)<sup>(16)</sup>によるオールラウンドの教育を意味していた。さらに、「エンキュクリオス・パイディア」の淵源が「音楽」や「舞踏」であるとするならば、「エンキュクリオス・パイディア」として円環的に配列された体系的な科目の背景には、「リズム」「メロディー」「ハーモニー」に繋がるバランスと調和があることになる。

### 3. 「エンキュクリオス・パイディア」の起源と形成

Koller, RijkならびにKühnertによれば、「エンキュクリオス・パイディア」の起源は、「ムーシケー」(mousike) すなわち「音楽」にある。<sup>(17)</sup> 「ムーシケー」とは元来、神々や英雄を称える言葉に音楽を伴ったものであり、<sup>(18)</sup> 初期の「ムーシケー」の概念は、「音楽」よりも幅広い概念で「詩」や「舞踊」をも含んでいた。<sup>(19)</sup> プラトンによれば「ムーシケー」と「ギュムナスティケー」(gymnastike) はコロスの舞踏の中で一つとなっており、<sup>(20)</sup> ここからやがて「ムーシケー」と「ギュムナスティケー」が分かれていき、また「ムーシケー」から「詩(文学)」や「文法」などが分かれ、「ギュムナスティケー」から「舞踏」とレスリングなどの「体育」が分かれていった。<sup>(21)</sup> ギリシアの教育では最初期から、心の教育としての詩と音楽による「ムーシケー」と舞踏に起源がある体の教育としての「ギュムナスティケー」が極めて重要視されていた。その背景には「健全な精神は健全な身体に宿る」という格言に象徴されるように心と体のハーモニーとバランスを目指した「カロカガティア」(kalokagathia, = kakos kai agathos) という理念があった。そして、「読み書き」や「ムーシケー」や「ギュムナスティケー」などの初等教育の上に、「エンキュクリオス・パイディア」が発展していった。

「エンキュクリオス・パイディア」は、ソフィストの教育に源がある。<sup>(22)</sup> 教育の目的を「人間の教育」としたのはソフィストのプロタゴラスであった。<sup>(23)</sup> プロタゴラスは、知恵、節制、勇気、正義、敬虔という「徳を教える教師」と自称していた。<sup>(24)</sup> 具体的には、ホメロスやヘシオドスなどの詩

の言葉の解釈を通して、徳の教育を行なっていた。<sup>(25)</sup> 詩に代表される文学の解釈には、語義や「文法」の問題がソフィストの教育では前提とされていた。ソフィストの教育で、第二に問題とされていたのは、古代民主主義社会で重要な演説の作法を教える「修辞学（弁論術）」であった。ゴルギアスとトラシマコスが詩の用法を散文に導入して「修辞学（弁論術）」を発達させた。ゴルギアスは、「説得をつくり出すもの」<sup>(26)</sup>と定義した「修辞学（弁論術）」を、紀元前427年にシシリー島からアテネにもたらした。ソフィストの教育で第三に問題とされていたのは、演説の論理的構成を教える「弁証学（弁証術）」であった。これはエレアの哲学者ゼノンとメリッソスによって展開されていたものであった。これらの「文法」「修辞学」「弁証学」は後の時代に「三科」（trivium）と呼ばれた。

他方、オルフェウス教に影響を受けたピュタゴラスは、「哲学」（philosophia）という言葉をもっと最初に用いた人であった。<sup>(27)</sup> ピュタゴラス学派では、ホメロスとヘシオドスを詩聖と仰ぎ、詩に音楽をつけて歌うばかりでなく、万物は「数」から生じたという観念により「算術」ならびに「幾何学」が尊重されていた。それらに加えて、「数」と組み合わせられたオクターブ理論などの「音楽」と天上の音楽と関係する「天文学」で構成された「数学」（mathemata）という学問体系を「哲学」と称していた。<sup>(28)</sup>

プラトンはピュタゴラス学派やヘラクレイトスなどの影響の下でイデア論を形成していったが、「ムーシケー」という言葉で、「ギュムナスティケー」という言葉と対立して、広い意味で詩などの「文学」を指すこともあったが、<sup>(29)</sup> 狭い意味では「音楽」を意味していた。また、広い意味での「フィロソフィア」という言葉は、ピュタゴラス的意味での「科学的探究」すなわち「算術」「幾何学」「音楽」「天文学」で構成された「数学」を指すこともあったが、<sup>(30)</sup> 狭い意味ではプラトンにとっての「真の哲学」すなわち「弁証論（弁証学）」を意味していた。<sup>(31)</sup> 後の時代にこれらの「算術」「幾何学」「音楽」「天文学」は「四科」（quadrivium）と呼ばれた。

「エンキュクリオス・パイデア」の発端は、紀元前350年頃に博学と称されていたソフィストのヒッピアスが、修辞学の一部である「記憶術」と「数学」（mathemata）と呼ばれた「算術」「幾何学」「天文学」「音楽」を統合したことに由来する。<sup>(32)</sup> 紀元前1世紀のキケロの時代には、「人間性（人間的教養）」（humanitas）を養う科目として「三科」と「四科」のリベラル・アーツ教育がほぼ確立しており、<sup>(33)</sup> ワッロでは「三科」と「四科」に医学と建築学を加えたりベラル・アーツ教育にまで発展していった。<sup>(34)</sup>

その間に、紀元前392年頃にイソクラテスは修辞学を「哲学」と呼んで、

修辞学の教育を中心とした修辞学校をアテナイに創設し、<sup>(35)</sup> それに対してプラトンは紀元前387年頃にイデア論に基づく世界観によって修辞学と詩学の真実性を否定して、「四科」を土台にして弁証論の哲学を研究教授するアカデメイアを創設した。<sup>(36)</sup> アリストテレスはプラトンのイデア論を批判的に克服すると同時にイソクラテスの修辞学の影響も受けていたが、紀元前335年にアテネのリュケイオンに学校を創設し、理論学として「自然学」と「形而上学」、実践学として「政治学」と「倫理学」、制作術として「修辞学（弁論術）」と「詩学」、これらの学問に共通な道具の学（方法論）として「論理学（弁証学）」という学問体系を構築した。<sup>(37)</sup> またその後の哲学は、一方のエピクロス学派では、哲学入門の「基準の学」「自然学」「倫理学」で構成され、<sup>(38)</sup> 他方のストア学派では「言葉の学」「倫理学」「自然学」で構成されていたが、「言葉の学」（ロギコン）には、「文法」「弁論術（修辞学）」「弁証術（論理学）」が含まれていた。<sup>(39)</sup>

しかし、イソクラテスとプラトンに代表される修辞学と哲学の対立・抗争を克服して、リベラル・アーツ教育の冠は修辞学であると位置づけたのはキケロである。<sup>(40)</sup> その教育思想は、その後の古代・中世・近世のヨーロッパの教育思想を深く刻印付け、キリスト教教育制度の始まりである修道院学校・司教学校・教区学校などにも、多大な影響を与えていった。<sup>(41)</sup>

#### 4. 古代ギリシア・ローマ時代の教育制度

古代ギリシア・ローマ時代の教育は、「家庭教師」（paedagogos）による家庭教育と教師による学校教育に大きく分けられていた。<sup>(42)</sup> しかし、学校教育は義務教育ではなく、学校に通うことができたのは、比較的裕福な自由人のエリート層であった。

古代ギリシア時代の教育制度は、「芸術」（kitharistike、音楽、〔mousike〕ダンス、絵画、他）や「体育」（gymnastike）を教えることから始まったが、やがて「読み書き」（gramma）を教えることが加わっていった。<sup>(43)</sup> ヘレニズム期以降の教育制度は、それらが統合された初等教育の「初等学校」、中等教育の「文法学校」、高等教育の「修辞学校」による三段階の教育制度であった。「初等学校」では「初等教師」（didaskalos）がアルファベットや数の数え方から始めて、読み書き算術や芸術や体育を教え、「文法学校」では「文法教師」（grammatikos）が文法や正しい言葉遣いやホメロスやヘシオドスやエウリピデスらの文学作品の読解や「自由七科」を教え、「修辞学校」では「弁論教師や修辞教師」（rhetores, sophistes）が弁論や修辞について教えて作文教育を施し、模擬弁論を指導した。<sup>(44)</sup> このような点から、紀元1世紀

のアレクサンドリアのフィロンは「エンキュクリオス・パイディア」を「メセ・パイディア」(mese paideia)、すなわち初等教育と高等教育(修辞学教育や哲学教育)との「中間の教育」とも呼んでいた。<sup>(45)</sup> やがて「修辞学校」を出た人々が政治家・裁判官・弁護士・軍人の司令官などの指導者層となり、あるいはさらに文法教師・弁論教師・修辞教師や哲学者などになっていた。

ヘレニズム期の三段階の教育制度は、原則として年齢に制限されずに必要に応じて教育を受けたのであり、また時代差や地方差があったが、一般的には初等教育は7歳から始まり、中等教育は14歳から始まり、高等教育は兵役とほぼ重なる18歳頃から始められたと思われる。それは7歳以前を指す「幼児」(paidion)、7歳から14歳を指す「子供」(pais)、14歳から21歳を指す「思春期」(meirakion)という言葉とほぼ対応していた。<sup>(46)</sup>

以上のような古代ギリシア・ローマ時代の教育制度が一様に見られたというマルーやボナーらの説は、現在でも基本的には受け入れられているが、一部修正されている。ユン・リー・トゥーの研究は、<sup>(47)</sup> 教育が元来持つ社会的側面と政治的側面を認め、また古代ギリシア・ローマ時代の教育はキリスト教学校の出現によって終わる<sup>(48)</sup> のではなく継続していると見做し、<sup>(49)</sup> さらにギリシア・ローマ時代の教育の一様性ではなく多様性を認めて、マルーらのギリシア・ローマ時代の教育史全般を書き改めようとしている。また、古代ギリシア・ローマ時代の教育について、従来のアテナイでエリートの知識人層が書いた古典的著作を資料としたギリシア中心部による研究ではなく、エジプトで発見されたオクシュリンコス・パピルスなどの辺境の庶民層が書き残した教育に関するパピルスを資料とした研究により、最近では再吟味がなされている。例えば、テレサ・モーガンは、ヘレニズム時代の文化やアイデンティティと結びついた教育の「核心」とそれ以外の「周辺」を区別し、例えばホメロスの作品のある部分は、いつの時代でもどの地域でも教えられており、ヘレニズム時代の教育の「核心」を成すが、それに比べてエウリピデスの作品はより「周辺」であり、メナンドロスの作品はさらに「周辺」であることを明らかにした。<sup>(50)</sup> ラファエラ・クリピオーレは、エジプトで教師や生徒が書き残した文字や文法の練習や文学作品の講読などを研究して、エジプトでの「初等学校」「文法学校」「修辞学校」の教育や教育文化を明らかにし、シリアのアンティオキアでのリバニオスの「修辞学校」の教育を解明している。<sup>(51)</sup>

## 5. 修辞学とは何か

古代ギリシア・ローマ社会は「修辞的社会」であり、弁論術や修辞学の素養が極めて重要であった。弁論術や修辞学とは、イソクラテスによれば「よく語ること」(eu logein)は「よく考えること」(eu phronein)のためであり、それは「よく行なうこと」(eu prattein)のためであったが、プラトンによれば「説得の技術」、<sup>(52)</sup> アリストテレスによれば「いかなることにも可能な説得の方法を見つけ出す能力」、<sup>(53)</sup> キケロによれば「説得を目指して適切に語ること」、<sup>(54)</sup> クインティリアヌスによれば「よく語るための学問」と定義されていた。<sup>(55)</sup>

修辞学と弁論術・雄弁術の違いは、「発想(構想)」「配列」「修辞(措辞)」「記憶」「実演(演説)」の五部門の中で、話し言葉の技術である弁論術・雄弁術では演説原稿の「記憶」と発話による「実演」を含めた五部門が重要であったが、書き言葉の技術である修辞学では最初の三部門が重要であり、それは詩・演劇や物語・歴史叙述・伝記・書簡などで用いられた。<sup>(56)</sup>

弁論は演説が語られる場によって三つの類型に分かれ、またそれぞれ二つの下位ジャンルに分かれていた。<sup>(57)</sup> 第一に、法廷で用いられる「法廷弁論」は、「告発」と「弁明」の演説に分かれ、プラトンの『ソクラテスの弁明』は、弁明の演説の代表例である。第二に、議会で用いられる「議会(審議)弁論」は、政策の「勧奨」と「阻止」に分かれ、イソクラテスの「平和演説」は、「勧奨」の代表的演説である。第三に、祭や葬礼などで用いられる「演示弁論」は、「称賛」と「非難」に分かれ、愛を称えたプラトンの『饗宴』は、「称賛」の代表的な演説である。

## 6. 修辞学の教育

修辞学の教育は、民主主義的な社会である都市国家において、演説を用いる政治家や法律家などの教育として発達していった。最初に修辞学の教則本を書いたのはシシリー島のコラクスとティシアスと言われているが、それは現在残されていない。その弟子のゴルギアスがギリシア本土に修辞学を伝えたが、ゴルギアスは詩などの韻文の用法を演説などの散文の中に用いたのであり、それはさらにイソクラテスやキケロなどを通して伝えられていった。<sup>(58)</sup> 修辞学の教育は基礎教育とそれを応用した上級教育に分かれていた。

### (1) 「プロギュムナスマタ」による修辞学の基礎教育

基礎教育の教則本として、「プロギュムナスマタ」(progymnasmata)が用

いられていた。ギリシア・ローマ時代では特に「法廷弁論」は、言葉による「闘争」(agon)とも言われていたが、「プロギュムナスマタ」とは、修辞学の本格的な「(諸)訓練」(gymnasmata, cf. gymnas, 「裸の」)すなわち「模擬弁論」の「前」(pro)段階、すなわち「予備的訓練」を意味した。「プロギュムナスマタ」の存在は、紀元前4世紀の『アレクサンドロス宛修辞学』(28.4)で既に言及されている。だが、現存しているのは、1世紀のアレクサンドリアのテオン、2世紀のタルソスのヘルモゲネス、リバニオスの弟子であった4世紀のアンティオキアのアフソニオス、5世紀のミュラのニコラオスがギリシア語で書いた四つの「プロギュムナスマタ」である。<sup>(59)</sup>

「プロギュムナスマタ」は主に文法学校で用いられていたが、修辞学校でも用いられていた。しかし、その用い方は時代と地域によって相違があった。例えば、クインティリアヌスは、1世紀のテオンの「プロギュムナスマタ」を前提にして、文法学校での「格言」「逸話」「寓話」の書き取り教育<sup>(60)</sup>と修辞学校での「叙述」「反論と論証」「称賛と非難」「共通論題」「一般命題」「法律についての称賛と非難」の作文教育<sup>(61)</sup>を分けている。それに対して、1世紀末から2世紀初めのスエトニウスによれば「プロギュムナスマタ」のすべての課程を文法学校で行なったが、<sup>(62)</sup> エジプトのパピルスによるとすべての課程は修辞学校で行なわれていた。<sup>(63)</sup>

「プロギュムナスマタ」は、演説原稿を作成するための実践的な作文教育の「カリキュラム」を意味すると同時に、そのカリキュラムのための「教則本」をも意味していた。現存する「プロギュムナスマタ」の間で、時代の変遷に伴って若干の内容と順序に違いがあるが、<sup>(64)</sup> 基本的な教育内容とその段階的順序は一致しており、それは簡単な内容から複雑な内容へと進む以下の14の作文教育の「カリキュラム」で構成されていた。<sup>(65)</sup>

第一段階では、イソップの「蟻とキリギリス」のように動物を主人公にした短い「寓話」(mythos)を創作し、ツキディデスなどの歴史書に従ってある具体的な歴史のテーマなどについて短い「叙述」(diegesis)を書き、さらに著名な人物のエピソードや教えなどについて「逸話」(khreia)<sup>(66)</sup>を書く練習をした。また「格言」(gnome)を「寓話」や「逸話」の結びなどに適切に効果的に入れる練習をした。

第二段階では、相手の主張を論拠や証拠をもって「反論」(anaskeue)し、自分の主張を論拠や証拠をもって「論証」(kataskeue)し、また、例えば独裁者や裏切り者や殺人者に反対し、独裁者殺しや英雄や法授与者について賛成する、という「共通論題」(koinos topos)について議論することを練習した。こうして法廷弁論の主要な要素を学んだ。

第三段階では、著名な人物について「称賛」(enkomion)し、また反対に「非難」(psogos)する文章を書く練習をした。さらに対照的な人物や物事あるいはその善悪などを「比較」(synkrisis)して、対比的に描く練習をした。「人物描写」(prosoopoiea)では、登場人物に適切な場面でふさわしい会話や演説を挿入して、適切な性格描写を書く練習をした。「記述」(ekphrasis)では、人物や事物などを詳細に生き生きと描く練習をした。こうして演示弁論の主要な要素を学んだ。

第四に、例えば「世界は神によって支配されているか」とか「人は結婚すべきか」などという一般的な「命題」(thesis)について論じ、また具体的な「法律」(nomos)を制定することについて賛否を論じる練習をした。こうして議会弁論の主要な要素を学んだ。

さらに、テオンにのみ記されていることであるが、これらの14のカリキュラムの方法論として、文学的テキストの一部を大きな声に出して読む「音読」(anagnosis)、音読された文学的テキストを聞き取る「傾聴」(akroasis)、文学的テキストを書き換える「敷衍」(paraphrasis)、文学的テキストに思想や表現を補って書く「補充」(exergasia)について言及している。<sup>(67)</sup>

## (2) 模擬弁論による修辞学の上級教育

「プロギュムナスマタ」による修辞学の基礎教育を終えると、さらに法廷弁論や議会弁論や演示弁論の「模擬弁論」(melete; declamatio)を行なう修辞学の上級教育に進んでいった。<sup>(68)</sup>「模擬弁論」では、法廷で行なう告発と弁明の両者を含む「法廷弁論の模擬弁論」(controversiae)と勧奨と阻止の両方を含む「議会弁論の模擬弁論」(suasoriae)に分かれていた。法廷弁論と議会弁論は、「序論」(prooimion; exordium)「陳述」(diegesis; narratio)「論証」(pistis; probation, confirmatio)「反論」(lusis; refutatio)「結論」(epilogos; peroratio, conclusio)で構成されていた。演示弁論にはこのような定まった構成はなかった。

修辞学の上級教育の教則本として修辞学のハンドブックが書かれたが、それらの代表的な著作として、ギリシア語で書かれたアリストテレス『弁論術』、アナクシメネス『アレクサンドロス宛修辞学』、ラテン語で書かれた『ヘレンニウス宛修辞学』、キケロ『発想論』『弁論家について』『弁論家』『弁論術の分析』、クインティリアヌス『弁論家の教育』などがある。この他に、フィロデーモス『修辞学について』<sup>(69)</sup>は、エピクロス学派の修辞学教育の内容を明らかにする。また、不詳のセグエリアヌスとアブシネスの修辞学のテキストは、3世紀初頭の修辞学教育の実態を明らかにする。<sup>(70)</sup>特に、ヘルモ

ゲネス『論点』は法廷弁論の構造と論点を明らかにし、弁論家メナンドロス『演示弁論の区分』は演示弁論の分類とその具体例を示している。<sup>(71)</sup>

### (3) ギリシア・ローマの修辞学教育の展開

ヘルモゲネスの「プロギュムナスマタ」は、6世紀にプリスキアヌスによってラテン語に翻訳されて (Praeexercitamina) 中世を経てルネサンス期にも用いられ、その英訳はルネサンス期以降にも用いられていた。アフソニオスの「プロギュムナスマタ」は、9世紀のサルディスのヨハネによって注解書が書かれてそれ以後広く用いられ、<sup>(72)</sup> またそのラテン語訳や英訳が中世からルネサンス期を経て近世にまで文法学校などで用いられていた。<sup>(73)</sup> また、ルネサンス期や近世以降にも『ヘレンニウス宛修辞学』、ケケロ『弁論家について』、クインティリアヌス『弁論家の教育』が修辞学の教育で用いられてきた。こうして、「プロギュムナスマタ」と修辞学ハンドブックによる修辞学の教育は、ギリシア・ローマ時代からキリスト教の諸学校でのキリスト教教育を経て、18世紀の啓蒙時代の世俗の学校教育に至るまで、ヨーロッパの教育では一貫して変わることがなかった。<sup>(74)</sup> しかし、アウグスティヌスの『キリスト教の教え』(De doctrina Christiana) 以後では、キリスト教学校で学ぶ「核心」は、ホメロスやヘシオドスではなく、「聖なる読書」(lectio divina) として聖書に置き換えられていった

その後、12世紀ルネサンスにおいて、修道院学校のリベラルアーツ教育の上に、サレルノでは医学、ポローニャでは法学、パリでは神学を学ぶ大学が、ヨーロッパで発祥したのであった。<sup>(75)</sup>

### 註

\* 本稿は、2007年6月30日に沖縄キリスト教学院大学で開催された日本キリスト教教育学会で発表した拙稿を書き改めたものである。尚、本稿は2007-2010年度の科学研究費基盤研究C「新約聖書おけるヘレニズム・ユダヤ人キリスト教書簡文学の修辞学的研究」の成果の一部である。

- (1) W. Jaeger, *Paideia: The Ideals of Greek Culture*, vols. 1-3, Oxford: Blackwell, 1947/ New York: Oxford University Press, 1969 (German Org. 1933-43); H. I. Marrou, *A History of Education in Antiquity*, London: Sheed & Ward, 1956 / Madison: The University of Wisconsin Press, 1982 (French Org. 1948), 95-101 = 『古代教育文化史』岩波書店、1985年。
- (2) プラトン『プロタゴラス』312a; 『国家』3.405a, 7.522b; 『法律』1.644a、参照。
- (3) Marrou, *A History*, 217-226; F. Kühnert, *Allgemeinbildung und Fachbildung in der Antike*, Berlin: Akademie Verlag, 1961, 10, 39, 71, 121.
- (4)

- "artes liberales" の正確なギリシア語訳は "technai eleutherioi" であるが、このギリシア語表現は稀にしか用いられず、時折単に "eleutheria" と呼ばれていた (例、デ
- (5) イオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』13.11。  
16世紀以後に、この言葉は知育に偏重して「あらゆる分野の知識に通じる」とい
- (6) う意味の「百科全書」(encyclopedia) に変わっていった。
- (7) Marrou, *A History*, 98-99, 196.
- (8) Jaeger, *Paideia*, vol.1, Foreword.
- (9) Marrou, *A History*, 99 n.6.  
ギリシア悲劇では、しばしば「コロス」(choros) による合唱と舞踊が入るが、そ
- (10) れは「コーラス」(chorus) の語源である。
- (11) 例、アエシネス 1. 10.
- (12) 例、アリストテレス『天体論』2.12.293a, 11.
- (13) 例、デモステネース『演説』20.21、ディオ・カッシウス『歴史』44.40.3.  
H. Koller, "Εγκυκλιος Παίδεια," *Glotta: Zeitschrift für Griechische und Lateinische Sprache* 34 (1955), 174-189.
- (14) F. Kühnert, *Allgemeinbildung und Fachbildung*, 7-18.  
L. M. de Rijk, "Εγκυκλιος Παίδεια: A Study of Its Original
- (15) Meaning," *Vivarium* 3 (1965), 24-93.
- (16) クインティリアヌス『弁論家の教育』1.10.1.  
Koller, "Εγκυκλιος Παίδεια"; Kühnert, *Allgemeinbildung und*
- (17) *Fachbildung*, 15, 17, 42; Rijk "Εγκυκλιος Παίδεια."
- (18) クインティリアヌス『弁論家の教育』1.10.9-10.
- (19) クインティリアヌス『弁論家の教育』1.10.22.
- (20) プラトン『法律』2.654a-f、参照。
- (21) プラトン『法律』7.795d、『国家』2.376e、参照。
- (22) H. Gomperz, *Sophistik und Rhetorik: Das Bildungsideal des ΕΥΛΕΓΕΙΝ in seinem Verhältnis zur Philosophie des V. Jahrhunderts*, Stuttgart: Teubner, (1912, 1965) 1985; James L. Jarrett, *The Educational Theories of the Sophists*, New York: Teachers College Press, Teachers College, Columbia University, 1961; 田中美知太郎『ソフィスト』講談社学術文庫、1976年; W. K. C. Guthrie, *The Sophists (A History of Greek Philosophy, vol. 3)*, Cambridge: Cambridge University Press, 1971, 176-225; G. B. Kerferd, *The Sophistic Movement*, Cambridge: Cambridge University Press, 1981; Susan J. Jarratt, *Rereading the Sophists Classical Rhetoric Refigured*, Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1991; J. de Romilly,
- (23) *The Great Sophists in Periclean Athens*, Oxford: Clarendon Press, 1992.
- (24) プラトン『プロタゴラス』317b, cf. Marrou, *A History*, 48-49.
- (25) プラトン『プロタゴラス』349a-b.
- (26) プラトン『プロタゴラス』338e-339a.
- (27) プラトン『ゴルギアス』455a, 453a.  
ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』8.8; キケロ『トウスクルム荘対談
- (28) 集』5.8-9.
- (29) アリストテレス『形而上学』1.5.985b-986a.
- (30) プラトン『国家』2.376e, 3.411c, e.

- (31) プラトン『国家』7.522a-531c.
- (32) プラトン『国家』7.6-12. Cf. Marrou, *A History*, 55.  
 プラトン『プロタゴラス』318e、『ヒッピアス(大)』285b-286a、『ヒッピアス(小)』366c-369a、『ソクラテス以前哲学者断片集』(ヒッピアス) A11-12. Cf.
- (33) Jaeger, *Paideia*, vol.1, 316-318; Marrou, *A History*, 55.  
 キケロは『弁論家について』で、「文法」「音楽」「数学」(1.9-11)、「文学(文法)」「弁論術(修辞学)」「幾何学」「音楽」「天文学」(1.187)、「文法」「弁証学」「音楽」「幾何学」(3.58, 127)を具体的に挙げ、また『善と悪の究極について』では「文法」「弁証学」「音楽」「幾何学」(3.3-5)、「文法」「弁証学」「修辞学」「音楽」「算術」「幾何学」「天文学」を挙げている。同時代のセネカは『書簡』(88)で「自由学芸」(88.1, *studia liberalia*; 88.23, *artes liberales*)として「文法」「文学」「音楽」「幾何学」「算術」「天文学」を挙げている。1世紀前後のアレクサンドリアのフィロン(『予備教育』3.74,75,『律法詳論』1.335, 5.81)、1世紀末に書かれたクインティリアヌス『弁論家の教育』(1.10.9-33, 36-45, 46-49, 12.2)、2世紀に書かれたセクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』などでは、「自由
- (34) 七科」の教育が前提になっている。
- (35) Marrou, *A History*, 254.  
 廣川洋一『イソクラテスの修辞学校』講談社学術文庫、2005年(岩波書店、1984年)。
- (36) 廣川洋一『プラトンの学園アカデメイア』講談社学術文庫、1999年(岩波書店、1980年)。
- (37) 1980年)。
- (38) アリストテレス『形而上学』6.1.1025b-1026a.  
 エピクロス「ヘロドトス宛の手紙」「ピュトクレス宛の手紙」「メノイケウス宛の手紙」『エピクロス：教説と手紙』、ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』
- (39) 10.
- (40) クリュシッポス「言葉の学」『初期ストア派断片集』第2巻、参照。  
 キケロ『弁論家について』では、弁論術が「最も教養のある人の技術」(1.5)と位置づけられ、「(森羅)万象の認識」(1.19-20)や「人間的教養」(1.35, 59,
- (41) 256)と表現されたりベラル・アーツ教育の冠として位置づけられている。  
 P. Riche, *Education et Culture dans L'Occident Barbare VI-VIII Siecles*, Paris: Seuil, 1962 P.リシェ『中世における教育・文化』東洋館出版、1988年; idem, *Ecoles et enseignement dans le Haut Moyen Age*, Paris, Picard-Editen, 1989 = 『ヨーロッパ成立期の学校教育と教養』知泉書館、2002年; 家入敏光『キリスト者・聖アウグスティヌス:キリスト教的雄弁家論』エンデルレ書店、1990年; 鈴木剛
- (42) 『西洋中世における知の伝達と人間形成』大坂印刷、1991年。  
 クインティリアヌス『弁論家の教育』1.2, cf. Marrou, *A History*, 232-233, 235-236, 266, 315-316; S. F. Bonner, *Education in Ancient Rome: From the Elder Cato to the Younger Pliny*, London: Methuen, 1977, 10-33. 「家庭教師」は、初等学校以前の家庭教育を行なう「家庭教師」から、初等学校に連れて行く「家庭教師」、さらに中等教育や高等教育を家庭で行なう「家庭教師」など様々な異なった担当者と役割
- (43) があった。
- (44) アリストテレス『政治学』8.3、参照。  
 Marrou, *A History*, 142-216, 265-291. Cf. M. J. Freeman, *Schools of Hellas: An Essay*

- on the Practice and Theory of Ancient Greek Education from 600 to 300 B.C.*,  
 (45) London: Macmillan, 1907; Bonner, *Education*, 34-111, 163-323.
- (46) フィロン『準備教育』11-18, 74-76, 142, 148-150.  
 アリストテレス『政治学』7.17.15、cf. Marrou, *A History*, 102-103。スパルタでは8歳から11歳、12歳から15歳、兵役の16歳から20歳の三段階に分けられていたと推定される (Marrou, *A History*, 20)。プラトン (『国家』2~3、7.16~18) は、18歳までに初等 (中等) 教育を終え、二年間の兵役を終えた後に20歳から高等教育が始まることを理想としていた。Cf. A. W. Nightingale, "Liberal Education in Plato's *Republic* and Aristotle's *Politics*," Too (ed.), *Education*, 133-173。兵役は時代と地方によって異なるが、18歳から20歳の1年ないしは2年であったが、ヘレニ
- (47) ズム時代には兵役制度は次第に衰退していった。  
 Y. L. Too, "Introduction: Writing the History of Ancient Education," idem (ed.), *Education in Greek and Roman Antiquity*, Leiden: Brill, 2001, 1-21. Cf. Y. L. Too, *The Rhetoric of Identity in Isocrates*, Cambridge: Cambridge University Press, 1995; idem, *The Idea of Ancient Literary Criticism*, Oxford: Oxford University Press, 1998; Y. L. Too & N. Livingstone (eds.), *Pedagogy and Power*, Cambridge: Cambridge University Press, 1998.
- (48) University Press, 1998.
- (49) Marrou, *A History*, 314-350.  
 S. Rappe, "The New Math: How to Add and Subtract Pagan Elements in Christian
- (50) Education," Too (ed.), *Education*, 405-423.  
 T. Morgan, *Literate Education in the Hellenistic and Roman Worlds*, Cambridge:
- (51) Cambridge University Press, 1998, 50-89, esp. 71-73.  
 R. Criboire, *Writing, Teachers, and Students in Graeco-Roman Egypt*, Atlanta: Scholars Press, 1996; idem, *Gymnastics of the Mind: Greek Education in Hellenistic and Roman Egypt*, Princeton: Princeton University Press, 2001; idem, *The School of*
- (52) *Libanius in Late Antique Antioch*, Princeton: Princeton University Press, 2007.
- (53) プラトン『ゴルギアス』453a.
- (54) アリストテレス『弁論術』1355b 33.
- (55) キケロ『弁論家について』1.31.138.
- (56) クインティリアヌス『弁論家の教育』1.15.36-37.  
 『ヘレンニウス宛修辞学』1.3、キケロ『発想論』1.9、『弁論家について』1.142、
- (57) 2.79、クインティリアヌス『弁論家の教育』3.3。  
 修辞学の五部門については、アリストテレス『弁論術』1.3、参照。修辞学を用いた詩・演劇や歴史叙述・物語・伝記・書簡などについては、S. E. Porter (ed.), *Handbook of Classical Rhetoric in the Hellenistic Period 330B.C.-A.D.400*, Leiden: Brill, 1997, 171-828; W. J. Dominik, *Roman Eloquence: Rhetoric in Society and Literature*, London: Routledge, 1997; W. Dominik & J. Hall (eds.), *A Companion to*
- (58) *Roman Rhetoric*, Oxford: Blackwell, 2007, 367-450.  
 T. M. Conley, *Rhetoric in the European Tradition*, Chicago: The University of Chicago Press, 1990; G. A. Kennedy, *A New History of Classical Rhetoric: An Extensive Revision and Abridgement of The Art of Persuasion in Greece, The Art of Rhetoric in the Roman World & Greek Rhetoric under Christian Emperors with Additional Discussion of Late Latin Rhetoric*, Princeton: Princeton University Press,

- 1994; L. Pernot, *Rhetoric in Antiquity*, Washington, D.C.: The Catholic University of America, 2005 (Org. French, 2000).
- Cf. A. Gwynn, *Roman Education from Cicero to Quintilian*, New York: Teachers College Press, Columbia University, 1945 (Oxford: Clarendon Press, 1926); D. L. Clark, *Rhetoric in Graeco-Roman Education*, New York: Columbia University Press, 1959 (1st. ed. 1957); M. L. Clarke, *Rhetoric at Rome: A Historical Survey, Revised and with a new introduction by D. H. Berry*, London: Routledge, 1996 (1st. ed. (59) 1953, 2nd. ed. 1966).
- L. Spengel (ed.), *Rhetores Graeci*, 3 vols., Leipzig: Teubner, 1854-56; H. Rabe (ed.), *Hermogenis Opera*, Leipzig: Teubner, 1913; idem (ed.), *Aphthonii Progymnasmata*, Leipzig: Teubner 1926; J. Felton (ed.), *Nicolai Progymnasmata*, Leipzig: Teubner, 1913; M. Patillon & G. Bolognesi (eds.), *Aelius Theon: Progymnasmata*, Paris: Les Belles Lettres, 1997; G. A. Kennedy, *Progymnasmata: Greek Textbooks of Prose Composition and Rhetoric, Translated with Introduction and Notes*, Atlanta: Society (60) of Biblical Literature, 2003.
- (61) クインティリアヌス『弁論家の教育』1.9.
- (62) クインティリアヌス『弁論家の教育』2.4.
- (63) スエトニウス『文法教師と修辞教師』25.4.
- (64) Criboire, *Gymnastics*, 220-230.  
詳しくは、Kennedy, *Progymnasmata*, xiii, Table 1、参照。テオンではその他と順
- (65) 序が異なり、最初に「逸話」「格言」「寓話」の順序で学んだ。  
Clark, *Rhetoric*, 177-212; Bonner, *Education*, 250-276; Kennedy, *A New History*, 202-208; Morgan, *Literate Education*, 191-192; R. Webb, "The Progymnasmata as Practice," Too (ed.), *Education*, 289-316; Criboire, *Gymnastics*, 220-230; Pernot, (66) *Rhetoric*, 146-151.
- R. F. Hock & E. N. O'Neil, *The Chreia in Ancient Rhetoric: Vol. 1, The (67) Progymnasmata*, Atlanta: Scholars Press, 1986.
- (68) Theon, *Progymnasmata*, chs.13-17.
- R. A. Kaster, "Declamation in Rhetorical Education at Rome," Too (ed.), *Education*, (69) 317-337.
- H. M. Hubbell, "The Rhetorica of Philodemus: Translation & Commentary," *Transactions of the Connecticut Academy of Arts & Sciences*, vol.23 (1920), 243-382; cf. E. Asmis, "Basic Education in Epicureanism," Too (ed.), *Education*, 209-239; J. T. Fitzgerald, D. Obbink & G. S. Holland (eds.), *Philodemus and the New Testament (70) World*, Leiden: Brill, 2004.
- M. R. Dilts & G. A. Kennedy (eds.), *Two Greek Rhetorical Treatises from the Roman Empire: Introduction, Texts & Translation of the Arts of Rhetoric Attributed (71) to Anonymous Seguerianus and to Aspines of Gadara*, Leiden: Brill, 1997.
- M. Heath, *Hermogenes On Issues: Strategies of Argument in Later Greek Rhetoric*, Oxford: Clarendon Press, 1995; D. A. Russell & N. Wilson, *Menander Rhetor*, (72) Oxford: Clarendon Press, 1981.
- (73) Kennedy, *Progymnasmata*, 173-228.
- D. L. Clark, "The Rise and Fall of Progymnasmata in the Sixteenth and Seventeenth

(74) Grammar School," *Speech Monographs* vol.19 (1952), 259-263.

S. Rappe, "The New Math: How to Add and Subtract Pagan Elements in Christian

(75) Education," Too (ed.), *Education*, 405-423.

S. S. Laurie, *Lectures on the Rise and Early Constitution of Universities with a Survey of Mediaeval Education A. D. 200 - 1350*, London : Kegan Paul, Trench & Co., 1886 ; H. Rashdall, *The Universities of Europe in the Middle Ages* (New Edition in 3 vols.), Oxford : Oxford University Press, 1936 (Orig. 1895); N. Schachner, *The Mediaeval Universities*, New York : A. S. Barnes & Co., 1962 (1938).